

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポルトガル語の動詞：静詞述部構文について
Author(s)	坂東, 照啓
Citation	ニダバ , 24 : 66 - 75
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047957
Right	
Relation	

ポルトガル語の動詞－静詞述部構文について

坂 東 照 啓

0. はじめに

ポルトガル語文法では、いわゆる「文型」によって文を分類するということが一般的に行われていない。つまり、「文型」が伝統的なポルトガル語文法で広く認められているような概念ではないのである。また、伝統文法では、この「文型」と関連する概念である「動詞型」についても直接これを扱う記述は見受けられない。このように「文型」、「動詞型」という考え方が一般的でないとする、ポルトガル語の文法研究者がこれまで文をその構造に従って分類するということに関心を持たなかったように思われるかもしれない。

しかし、決してポルトガル語の伝統的な文法において文を分類するという考え方が存在しなかったというわけではないのである。ポルトガル語文法においても文を分類するような伝統的な概念が存在している。つまり、「文型」や「動詞型」に相当するような概念がポルトガル語文法においても存在するのである。その「文型」や「動詞型」に相当する概念というのは、「述部型」(tipos de predicado) である。

もっとも、この「述部型」は、文そのものを分類しているものではない。その名も示すように、文ではなく述部を分類するものである。しかし、「文型」や「動詞型」も、主部については特に分類を行わず、修飾部にも言及せず、述部のみに注目して文を分類している。つまり、「文型」や「動詞型」も実質的には述部の分類を行っているものであり、それがすなわち文を分類することになっているのである。従って、述部を分類する「述部型」も内容的に「文型」や「動詞型」と変わらず、文の分類に直結しているのである。見方をかえれば、ポルトガル語文法では、伝統的に「文型」や「動詞型」とは別の概念によって文の分類を行ってきたとも言える。

ポルトガル語文法においてこうした「述部型」として一般に分類されている1つの型に、動詞－静詞述部(predicado verbo-nominal) がある。この述部を持つ文は、概ね1つの文の中にもう1つ文が存在しているような構造を有

するものである。本稿では、この動詞－静詞述部として分類されている構文を、まず、伝統的な立場をとる文法書の記述に基づき分析し、考察を加えたい。さらに、従来からなされている他の述部型との関連を考慮した上で、動詞－静詞述部といった分類についても考えてみることにしたい。

1. 述部における中心的要素

多くの伝統的な立場の文法書でも述べられているように、述部は、主語（あるいは、主部）とともに、文を成立させる基本的要素である。この文の成立にとって不可欠な述部を構成する中心的要素となるのは、動詞か静詞（及び、静詞相当句）である。

1. 1. 述部と述語

ポルトガル語の伝統的な文法書では、一般に、述部(predicado) は主語を叙述するすべてのものと述べられている。(1)では、主語 A irmã de Paulo を叙述する molhou a barra do vestido 全体が述部と考えられる。(なお、本稿で用いる略号・記号については後に一括して掲げる)

- (1) A irmã de Paulo molhou a
the-f-sg sister-f of Paul-m wet-IdPP-3sg the-f-sg
barra do vestido.
trimming-f of+the-m-sg dress-m

「パウロの妹は、ドレスのすそ飾りを濡らした」

この述部とは別に、ポルトガル語の伝統的な文法書には述語(predicativo) という用語も見られる。述語は先に述べた述部と名称は類似するが、概念は異なる。つまり、述語とは、静詞述部の核となる語彙的意義を持つ要素のことをいう。(2)では、主語 O frango を叙述する静詞述部 era muito gordo の中心的要素 gordo が、述語とみなされる。

- (2) O frango era muito gordo.
the-m-sg cockerel-m be-IdPI-3sg very fat-m-sg

「若鶏はとても太っていた」

これに対し、(3)における動詞 comprou については述語とはみなされない。

- (3) O menino comprou o livro.
the-m-sg boy-m buy-IdPP-3sg the-m-sg book-m

「少年は本を買った」

確かに、主語 O menino に対する述部 comprou o livro の中心的要素は comprou であるとみなされる。それ故に、この comprou が述語であると考えられるかもしれない。しかし、この述部は、動詞である comprou が核

となっている動詞述部であり、(2)のような静詞が核となっている静詞述部ではない。つまり、上述のように、述語とは静詞述部の中心的要素であって、動詞述部では、その中心的要素である動詞は述語でもなく、また、述語とみなされる要素も存在しないのである。

1. 2. 静詞

ポルトガル語の文法書には、**nome** (形容詞形 **nominal**) といった用語が現れる。この用語については、「名詞」という訳があてられやすい。しかし、**nome** は、いわゆる名詞ではない。なぜなら、**nome** は、性によって区別され、数を示す形態論上の範疇を表わす用語だからである。つまり、**nome** は文法範疇として単に名詞だけを含むというわけではないのである。具体的には、**nome** は、名詞だけではなく、代名詞、形容詞、さらに動詞の過去分詞をも含みうる。実際に、厳密に名詞だけを意味する用語が別に存在する。それは、**substantivo** である。

nome には、さらに広義の解釈もある。この解釈では、**nome** が副詞（及び、副詞相当句）をも含む。ところで、副詞は、性によって区別されないし、数による変化もない。それ故、副詞は上で述べた **nome** の定義からはずれており、矛盾するようである。しかし、この広義の解釈では、**verbo** (動詞) に対立する用語として **nome** を考えているのである。ここでは、性・数といった形態論上の特徴については考慮していない。**verbo** 以外のものを **nome** とみなすため、副詞（句）をも含む解釈が生じているのである（ただし、前置詞、接続詞など述語として機能しないものは除かれる）。

上述のように、**nome** は、われわれが普通に考える名詞のみを意味する用語ではない。**nome** は「名詞」より広い範疇を表わす用語なのである。事実、「名詞」では **nome** という用語が表わす範疇を十分には表わしていない。そこで、**nome** には、この用語が示す意味に対応するような訳をあてる必要があると考えられる。

このことについて、まず、**nome** と対立する用語である **verbo** が、普通は動的であり、「動詞」と呼ばれていることが注目される⁽¹⁾。この「動詞」は、その文法的な特徴ではなく意味上の特徴に基づいて呼ばれているものである。そこで、この「動詞」という訳と並行的に、文法的な特徴ではなく意味上の特徴を捉え、**verbo** と対立的であることを考えると、**nome** には、「静詞」という訳が考えられる。

1. 3. 動詞

述部における動詞は、その文法的特徴によって、まず3つに分類される。その1つは自動詞である。

- (4) Todos choraram.
all-m-pl cry-IdPP-3pl
「みんなが泣いた」

動詞 *choraram* は、目的語や補語を伴うことなく、主語とそれ自身だけで完結した意味を持つ。こうした自立的な動詞が自動詞とみなされる。

もう1つは、他動詞である。

- (5) O homem enfrentou seu adversário.
the-m-sg man-m face-IdPP-3pl his-m-sg adversary-m
「男は敵と向い合った」

動詞 *enfrentou* は、目的語 *seu adversário* を伴っている。このように主語だけでなく、他の要素（すなわち、目的語）を伴ってはじめて意味が完結する動詞が他動詞とみなされる。

そしてもう1つが連結動詞である。

- (6) Luciana é linda.
Lucian-f be-IdPS-3sg beautiful-f-sg
「ルシアーナは美しい」

動詞 *é* は、*Luciana* と *linda* を主語と述語の関係に結びつけている。このように2つの要素を主語－述語関係に文法的につなぐ機能を持つ動詞が連結動詞である⁽²⁾。

上の3種の動詞のうち、他動詞はさらに3つに分類される。

その1つは直接他動詞である。これは目的語を要求するが、その場合に前置詞は必要としない。(5)における *enfrentou* がこの直接他動詞の例である。

もう1つは、間接他動詞である。

- (7) Este livro pertence a meu colega.
this-m-sg book-m belong-IdPS-3sg to my-m-sg
colleague-m
「この本は私の同僚のものです」

(7) では、動詞 *pertence* 単独ではなく、前置詞 *a* を伴って目的語 *meu colega* を従えている。このように前置詞を伴って目的語を要求する動詞が間接他動詞である⁽³⁾。

そして最後の1つは、直接間接他動詞である。

(8) O anfitrião ofertou um presente a
 the-m-sg host-m offer-IdPP-3sg a-m-sg present-m to
 cada visitante.
 each visitor-m

「主人はすべての客にプレゼントをした」

(9) Mandeí-lhe um ramallete de flores.
 send-IdPP-1sg+to her a-m-sg bunch-m of flowers-f

「私は彼女に花束を送った」

(8) では、動詞 *ofertou* が、直接目的語 *um presente* だけでなく、付加語 *a cada visitante* をも従えている⁽⁴⁾。(9) では、動詞 *mandei* が直接目的語 *um ramallete de flores* だけでなく、間接目的語 *lhe* をも従えている。このように直接目的語と付加語、あるいは、直接目的語と間接目的語を要求する動詞が直接間接他動詞である⁽⁵⁾。

2. 従来の述部の分類と静詞

ポルトガル語の伝統的な文法書においては、文型（あるいは動詞型）という用語そのものがあまり一般的ではない。しかし、文型に密接に関連する概念である「述部型」が、伝統的な立場の文法書において記述されている。

2. 1. 述部型

従来の伝統文法では、文の述部について3つの型に分類している。その3つとは、動詞述部(*predicado verbal*)、静詞述部(*predicado nominal*)、動詞－静詞述部(*predicado verbo-nominal*) である。動詞述部は、動詞が述部の中心的要素となっているものであり、静詞述部は、静詞（または、静詞相当句）が述部の中心的要素となっているものであり、動詞－静詞述部は、動詞と静詞（または、静詞相当句）が述部の中心的要素となっているものである。つまり、ここでは、述部の核となっている要素によって分類を行っているのである。

こうした伝統文法における述部を分類するという考え方は、いわゆる「文型」と共通する面を持っている。つまり、「文型」では、主語や修飾語は考慮せず、述部の構造のみによって文を分類する。言い換えれば、「文型」も、述部を分類することによって文を分類しているのである。

2. 2. 静詞を述部の中心的要素として有する型

2. 2. 1. 静詞述部

静詞（あるいは静詞相当句）が述部の中心的要素となっている型が静詞述部である。

(10) Ela estava animada ontem.
 she be-IdPI-3sg animated-f-sg yesterday
 「彼女は昨日生き生きしていた」

(11) Maria estava com pressa.
 Mary-f be-IdPI-3sg with hurry-f
 「マリアは急いでいました」

(10) では静詞 *animada* が、(11) では静詞相当句 *com pressa* が述部の核となっている。この型では、主語に対する叙述が静詞または静詞相当句によってなされており、動詞は主語の概念を叙述していない。つまり、この型の動詞は連結動詞で、主語と述語である静詞をつなぐ働きをしている。

2. 2. 2. 動詞－静詞述部

動詞と静詞（あるいは静詞相当句）が述部の中心的要素となっている型が動詞－静詞述部である。この型における動詞は、自動詞の場合と他動詞の場合がある。

(12) Os alunos saíram da escola
 the-m-pl pupils-m go-IdPP-3pl of+the-f-sg school-f
 bons.
 good-m-pl

「良かった生徒たちが学校を出た」

(13) O juiz declarou o
 the-m-sg judge-m declare-IdPP-3sg the-m-sg
 réu
 defendant-m innocent-m-sg

「裁判官は、被告を無罪と宣告した」

(12) では、自動詞 *saíram* と静詞 *bons* が、(13) では、他動詞 *declarou* と静詞 *inocente* が、それぞれの述部における主要な要素である。つまり、(12) では自動詞が、(13) では他動詞が述部動詞である。しかし、(12) と (13) の相違は、述部動詞の自他だけとは言えない。静詞の機能も異なっている。(12) では、*bons* が主語である *Os alunos* の述語であるのに対し、(13) では、*inocente* は主語である *O juiz* の述語ではなく、目的語である *o réu* の述語である。つまり、(12) と (13) では、述部における静詞によって叙述されている要素が、前者では主語、後者では目的語という違いも存在するのである。

ただし、動詞－静詞述部で、動詞が他動詞の場合には、常に静詞も主語に対する述語の機能を担うというわけではない。

(14) Os moradores deixaram o
 the-m-pl residents-m leave-IdPP-3pl the-m-sg
 prédio apressados.
 building-m hasty-m-pl

「住民は急いで建物を離れた」

(14) では、他動詞 *deixaram* と静詞 *apressados* が述部における中心的な要素である。この (14) も、述部の動詞が他動詞であるという点においては (13) と同じである。しかし、(13) と (14) では静詞の機能が異なっている。(13) では、静詞が目的語に対する述語の機能を担っていたが、(14) での静詞は、目的語 *o prédio* の述語ではなく、主語である *Os moradores* に対する述語としての機能を担っている。つまり、(14) は (15a) と (15b) の2つの文から成っているような構文と考えられる。

(15) a. *Os moradores deixaram o prédio.*

b. *Os moradores estavam apressados.*
 be-IdPI-3pl

以上のように、動詞－静詞述部で、動詞が他動詞の場合には、静詞が目的語に対する述語の機能を担う場合と、主語に対する述語の機能を担う場合がある。

3. 動詞－静詞述部における静詞の特徴

前章で見たように、動詞－静詞述部は、動詞の自他、及び、静詞が担う機能によって3つのタイプに下位分類される。

3. 1. 動詞が自動詞の場合

動詞－静詞述部で、動詞が自動詞の場合、静詞は常に主語に対する述語として機能する。すでに述べたように、(12) では、*bons* は *Os alunos* に対する述語である。もっとも、この *bons* は (12) の文の成立にとって不可欠な要素というわけではない。つまり、(12) における *bons* は、文の中で二次的な資格しか持たない修飾語であり、述部動詞 *sair* が義務的に要求しているような項ではないのである。

しかしながら、(12) において *bons* は、*saíram* と全く関係がないというわけでもない。*bons* は、*saíram* の影響を受けているのである。つまり、(12) は、学校を出た時において生徒たちが良かった、ということであり、生徒たちは過去において一時的に良かったと解釈される。決して、本質的に良かったということは意味していない。実際、この意味が示される文は、(16) なのである。

(16) *Os bons alunos saíram da escola.*

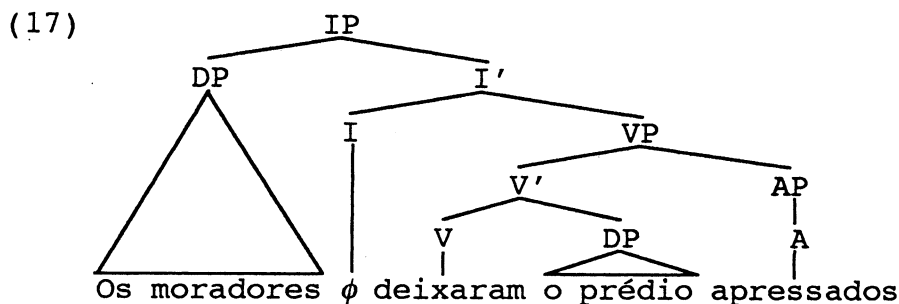
「良い生徒たちが学校を出た」

(16) と (12) では、bons の位置が異なっているだけだが、(16) における bons は saíram の影響を受けずに alunos を修飾している。つまり、生徒たちの良いという性質は、本質的なもので、saíram から限定を受けていない。述部型としても (16) は (12) と異なっている。すなわち、(16) は動詞－静詞述部ではなく動詞述部である。

3. 2. 動詞が他動詞の場合

動詞－静詞述部で、動詞が他動詞の場合は、静詞が目的語に対する述語の機能を担う型と、主語に対する述語の機能を担う型があるということをすでに見た。(13) はこの前者の型であるが、静詞である inocente は、(12) の bons と異なり、文の成立にとって義務的な基本成分である。これに対し、(14) は、後者の型であるが、apressados は随意的な要素である。

(14) における apressados は、(12) における bons の場合と同様に、述部動詞である deixaram が必要としている項ではないが、やはり限定を受けている。つまり、住人が建物を離れる時の様態が急いでいたということである。この (14) は、(17) のような構造を持つと考えられる⁽⁶⁾。



apressados は、deixar の項構造に参加する要素ではなく、それ故、付加部にあると考えられる。実際、(14) は (18) のようにも書き換えられる。

(18) Os moradores deixaram o prédio apressadamente.
hastily

(18) では、(14) における apressados が apressadamente という様態の副詞に換わっているが、v の付加部にあるということは同じである。ただし、述部型としては (18) は (14) と異なり、動詞述部として分類される。

4. 結論にかえて

ポルトガル語の伝統的な枠組みに従う文法書では、述語あるいは述部の中心語が何か、具体的には動詞か、静詞か（あるいはその両方ともか）によって述部を分類している。本稿では、特に動詞－静詞述部を詳細に見てきたが、その

分析から、従来の述部の分類について問題点が指摘されうる。

それは、一次的な主述関係と二次的な主述関係の区別を重視していないことである。文の成立にとって基本となる一次的な主述関係に対し、二次的な主述関係は文の成立にとっては随意的なものである。例えば、(12)における *Os alunos saíram da escola* が文の成立に基本となる一次的主述関係を成しているのに対し、*Os alunos* と *bons* は主述関係にはあるものの、*bons* が省略され、この二次的な主述関係が存在しなくとも文は成立する。(12)は動詞－静詞述部に分類されるが、この文の随意的な要素である *bons* が現れていなければ、動詞述部とされる。つまり、随意的な要素が現れている場合と現れていない場合で異なる述部型に分類されてしまうのである。(14)に関しても同様で、これは動詞－静詞述部に分類されるが、随意的な要素である *apressados* が現れていなければ動詞述部とされ、随意的な要素の有無で異なる述部型に分類されてしまうことになる。

こうした問題は、まず最初に、一次的な主述関係と、文の成立にとって随意的な要素によって生じている二次的な主述関係を区別しておくことによって避けられる。その区別によって、(12)のような述部は自動詞述部の派生型、(14)のような述部は他動詞述部の派生型として分類されうる。

【略記号】

IdPS	直説法現在	m	男性
IdPI	直説法未完了過去	f	女性
IdPP	直説法完了過去	sg	単数
1	1人称	pl	複数
3	3人称		

【注】

(1) すべての動詞が「動的」というわけではない。しかし、時制、相を有することからも、行為や一時的あるいは変化しつつある事柄を示すのに適しており、その本質から動詞は「動的」とであると特徴付けられる。

(2) (6)における *é* は文法的な形式語とみなされるが、すべての連結動詞がこれと同様の形式的意味しか持たないというわけではない。例えば、連結動詞としての *ficar* 「なる」、*permanecer* 「ままである」、*parecer* 「見える」などは、主語と述語を結ぶという文法的意味とともに一定の語彙的意味をも併せ持つと言える。

(3) 間接他動詞は、前置詞を伴わずに、間接目的格代名詞を目的語とすることもある。ただし、すべての間接他動詞が間接目的格代名詞を目的語と

しうるというわけではない。

(4) *a cada visitante* は副詞相当句で付加語と考えられるが、こうした要素をポルトガル語の伝統文法では一般的に間接目的語として記述している。

(5) 直接間接他動詞は、二項他動詞(*verbo bitransitivo*) と呼ばれる。

(6) (14) の構造としては、(17) とは別の分析も考えられる。それは、PRO を設定し、PRO と *apressados* が IP を成すという分析である。これによると、(14) は、 $[_{IP} \text{ Os moradores } [_{VP} \text{ deixaram o prédio } [_{IP} \text{ PRO } [_{AP} \text{ apressados }]]]]$ のように考えられる。この分析は、PRO と *apressados* が小節を成すという立場に基づくものである。

【参考文献】

- 安藤貞雄 (1989): 『英語教師の文法研究』 大修館。
安藤貞雄・小野隆啓 (1993): 『生成文法用語辞典』 大修館。
Cegalla, Domingos Paschoal. (1987): *Novíssima Gramática da Língua Portuguesa*. Nacional, São Paulo.
Cunha, Celso. & Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
彌永史郎 (1989): 「辞書学的にみたポルトガル語動詞の分類法」 『京都外国語大学研究論叢』 第XXXIII号, pp.272-289.
彌永史郎 (1990): 「C.P.ルフトの動詞分類」 『京都外国語大学研究論叢』 第XXXV号, pp.166-181.
黒川泰男 (1986): 『英文法再発見(上)』 三友社。
ジェフリー・リーチ, ヤン・スヴァルトヴィック (1983): 『現代英語文法〈コミュニケーション編〉』 池上嘉彦 池上恵子訳 紀伊国屋書店。
Luft, Celso Pedro. (1986): *Moderna Gramática Brasileira*. Globo, Rio de Janeiro.
Luft, Celso Pedro. (1987): *Dicionário Prático de Regência Verbal*. Ática, São Paulo.
Macambira, José Rebouças. (1987): *A estrutura morfo-sintática do português*. Pioneira, São Paulo.
Maia, João Domingues. (1991): *Gramática - Teoria e Exercícios*. Ática, São Paulo.
ランドルフ・クワーク, シドニー・グリーンバウム (1988): 『現代英語文法〈大学編〉』 池上嘉彦 訳 紀伊国屋書店。
Sacconi, Luiz Antonio. (1990): *Nossa Gramática - teoria*. Atual, São Paulo.
Saviali, Francisco Platão. (1992): *Gramática em 44 lições*. Ática, São Paulo.
Tufano, Douglas. (1990): *Estudos de Língua portuguesa - Gramática*. Moderna, São Paulo.